

漢字熟語を細かい音に分離しなくても 同音判断ができるのか？

—中国語母語話者での検討—

○馬 達・森田愛子

(広島大学大学院教育学研究科)

問題

何かを読むときに行われる音韻情報処理には、2種類のタイプがある。アルファベット言語でも日本語でも、単語の同音判断を行う際に、構音抑制をかけてもパフォーマンスが下がらないという実験結果から、通常、単語を処理する場合には構音コントロール過程を経ないタイプの音韻情報処理を行うとされている (e.g., 森田・齊藤, 2012)。これは、単語の音を細かい単位に分離せずに判断できることを示唆する。一方、中国人日本語学習者が日本語漢字熟語を処理する際には、構音コントロール過程を経るタイプの音韻情報処理、すなわち、単語を細かい単位に分離する処理を行うという結果が得られている (馬・森田, 2018)。日本語が第二言語であるために、母語話者と異なるタイプの処理を行っているとも考えられるが、中国語母語話者がもともと単語の音を細かい単位に分離する傾向があるとも考えられる。本研究では、中国語母語話者が中国語熟語に対してどちらの音韻情報処理を行うかを検討した。

方法

参加者 中国語を母語とする大学院生 12 名。

実験計画 構音抑制 (あり・なし) の 1 要因参加者内計画。

課題 2 つの中国語漢字二字熟語が同音語かどうかを判断する同音判断課題を実施した。

刺激 核となる熟語 (例: 仪器 yi2qi4) と、その同音語 (例: 遗弃 yi2qi4) および非同音語 (例: 超越 chao1yue4) の 3 つからなるセットを 54 セット用意した。同音語あるいは非同音語を核の熟語と対にして呈示した。ただし、同じ単語が 1 人の参加者に 2 回呈示することがないようにカウンターバランスをとった。

手続き 個別実験を行った。1 試行の流れは次のとおりである。注視点「+」を画面中央に 200 ms 呈示し、300 ms のブランクの後、2 つの単語を横書きで水平に並べて呈示した。同音語だと判断した場合には青いキー、同音語ではないと判断した場合には赤いキーを押すように教示した。54 試行のうち、半数の構音抑制条件では、参加者に中国語の発音で「1, 2, 3, 4」と一定のリズムで唱え続けることを求めた。

結果

平均反応時間を Table 1 に示す。2 (同音性: 同音語・非同音語) × 2 (構音抑制: あり・なし) の 2 要因分散分析を行ったところ、同音性の主効果は有意ではなかった。構音抑制の主効果は有意であり、構音抑制あり条件において、なし条件より遅かった。交互作用は有意ではなかった。

平均誤反応率を Table 2 に示す。誤反応は非常に少なく、反応時間と同様の 2 要因分散分析を行ったが、同音性の主効果、構音抑制の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。

考察

構音抑制をかけると反応が遅くなるという結果は、中国語母語話者が構音コントロールを経るタイプ、すなわち、単語の音を細かい単位に分離する処理を行っていることを示唆する。この結果は、森田・齊藤 (2012) において、日本語母語話者に細かい音の判別を求めた実験の結果と類似している。中国語ではアクセントが豊富であり、細かいレベルで音を重視して音韻情報を判断している可能性がある。中国語と日本語では、同じ漢字という文字が使われているものの、両言語の母語話者は異なるタイプの音韻情報処理を行っている可能性が示された。

Table 1 同音判断における反応時間 (ms)

	同音語		非同音語	
	反応時間	SD	反応時間	SD
構音抑制あり	1094.5	(166.6)	1137	(169.9)
構音抑制なし	1025.4	(155.2)	1062	(134.4)

Table 2 同音判断における誤反応率 (%)

	同音語		非同音語	
	誤反応率	SD	誤反応率	SD
構音抑制あり	3.2	(5.1)	2.4	(4.7)
構音抑制なし	2.5	(3.7)	2.6	(7.0)